

星ナビ

9 2025
September

hoshinavi.com

@Hoshinavi

CONTENTS



■今月の表紙

Askar 130PHQによるM31

撮影/渡邊耕平(望遠鏡ショップシュミット)
2023年7月23日 露出180秒×40(120分)
Askar 130PHQ+0.7倍レデューサー
ZWO ASI2600MC Pro (-10°C) ゲイン100
Sky-Watcher EQ6R+ZWO ASI174MM
mini オフアキシスで追尾

秋の天体写真の主役といえばM31アンドロメダ銀河。大口径屈折望遠鏡Askar130PHQと冷却CMOSカメラを組み合わせることで、わずか2時間の撮影でしたが、ディテールよく写すことができました。今月号では、36ページから130PHQをはじめとした個性豊かなAskarの屈折望遠鏡たちの全ラインナップを紹介しています。

■広告さくいん

コニカミノルタプラネタリウム/表2
マルミ光機/4
ワイルド・ナビゲーション/10
シュミット/66
協栄産業/68
アイベル/70
星をもとめて/72
笠井トレーディング/82~87
ウィリアムオブティクス/102
ピクセン/114~表3
五藤光学研究所/表4
AstroArts/8、12、20、48、74
AstroArtsオンラインショップ/88~91

星ナビ2025年9月号
2025年8月5日発行・発売

ニュースを深掘り! V宙部

Seestar
16 S50を借りて
みた 猫谷こな

未明の赤い月

30 9月8日
皆既月食

谷川正夫

撮影/谷川正夫

全ラインナップ研究

36 Askar
屈折望遠鏡のすべて

渡邊耕平

49 星の街道をゆく プラネタリウム はじまりへの旅 後編

中山満仁

56 連載小説「オリオンと猫」第7回 心より心へ

——野尻抱影と大佛次郎物語——

瀬名秀明

News Watch

5 切手でたどる宇宙開発史 宇宙フロンティア展 石田 智

Photo Topic

6 H-IIAロケット50号機、星空へラストフライト 北山輝泰



撮影/北山輝泰



H-IIAロケット最後の打ち上げ (p.6) 星座アフタヌーンティー (p.13)

ネブラ・スカイディスクを訪ねて (p.49) お台場で深宇宙展 (p.75)

NEWS CLIP 石川勝也

由女のゆるゆる星空レポ 星の召すまま

最新宇宙像 沼澤茂美+脇屋奈々代

9月の星空 篠木新吾

9月の月と惑星の動き

9月の天文現象カレンダー

9月の注目 あさだ考房

新着情報

月刊ほんナビ 原 智子

三鷹の森 渡部潤一

アクアマリンの誌上演奏会 ミマス

ブラック星博士のB級天文学研究室

天文台マダムがゆく 梅本真由美

天文・宇宙イベント情報 パオナビ

9、11 天文学とプラネタリウム 高梨直弘&平松正顕 77

Observer's NAVI 変光星 高橋 進 78

新天体・太陽系小天体 吉本勝己 80

星ナビひろば 92

● ネットよ今夜もありがとう 93

● 会誌・会報紹介 93

● やみくも天文同好会 藤井龍二 96

● 飲み星食い月す 96

ギャラリー応募用紙/投稿案内 97

バックナンバー・定期購読のご案内/編集後記 98

オンラインショップ連動 買う買う大作戦 99

KAGAYA通信 100

星ナビギャラリー 103

銀ノ星 四光子の記憶 飯島 裕 112

AstroArts Online shop

サマーセール2025

9月1日(月) 18時まで

晴天祈願! 開雲カラビナ
プレゼント!



天文ソフト・「星ナビ」定期購読 特典付き・特価販売

ステラシリーズ

セール期間中に「ステラシリ
ーズ」または「ステラLiteシリ
ーズ」製品をご購入の方(DL版も含む)、
または「星ナビ」定期購読(新規・継続)をお
申込みの方に、「開雲カラビナ」を差し上げます。

特典

※特典は数に限りがあります。予定数に達しましたら特典プレゼントは終了させていただきます。あ
らかじめご了承ください。また、プレゼントはお一人様1点とさせていただきます。



天文シミュレーションソフト 「ステラナビゲータ12」

価格 15,400円 →
セール特価 13,420円

天体画像処理ソフト 「ステライメージ10」

価格 33,000円 →
セール特価 29,700円

天体撮影ソフト 「ステラショット3」

価格 36,300円 →
セール特価 32,670円

※セール特価は全て、税込み・送料無料

「星ナビ」定期購読

通常価格 15,000円 →
セール特価 13,800円

新規・継続とも ※税・送料込み ※ウェブ申し込み限定



ご注文はこちら!
→ go.astroarts.co.jp/2025summer



■お問い合わせ
株式会社アストロアーツ
〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷2-41-12 富ヶ谷小川ビル1F
TEL: 03-5790-0871(代) FAX: 03-5790-0877

V宇宙部

ニュースを深掘り!

今回の担当

天文系VTuber
猫谷こcona (ねこや こcona)
協力◎天文ハウス TOMITA



スマート望遠鏡 Seestar 借りてみた!

天文系 VTuber が話題のトピックを紹介するコーナー。
やさしい星空解説で活躍中の猫谷こconaさんが、
「レントミ」で「Seestar S50」を借りてレポートします。

ここにゃー! やさしい星空解説をメインに活動している天文系VTuber・猫谷こconaです☆今回は天文ハウス TOMITA さんの望遠鏡レンタルサービス「レントミ」で、話題のスマート天体望遠鏡「Seestar S50」をレンタルし、実際に天体観望してきました!

望遠鏡や機材をレンタル

「レントミ」は今年の2月に始まった、望遠鏡ショップ・天文ハウス TOMITA さんの望遠鏡・双眼鏡の全国配送レンタルサービスです。金銭面、時間的にハードルが高くて機材を使った天体観測や撮影には手を出しにくい……そんな方でもレントミを使えば気軽に宇宙を楽しめちゃいます。

実際に Web サイトを覗いてみると、望遠鏡や双眼鏡が種類豊富に用意されていて感動しました!

レントミを運営する天文ハウス TOMITA の天本湧樹さんに話を聞くと、「家族とのお出かけで天体観測用に借りられる方や、望遠鏡を買う前のお試しとして利用される方などがある」とのこと。都会を離れて、キャンプやグランピングに持っていくのも楽しそう!

今回レンタルした Seestar S50 のほか、猫谷の持ってる望遠鏡・ピクセン ポルタ II A80mf もレンタルできるみたい。手に入れるのが難しいイメージのある望遠鏡や双眼鏡を、購入する前にお手軽に試せちゃうのはありがたいですね。

猫谷こcona

© Nekoya Cocona



癒しと笑いですぐ笑顔! 天文系 VTuber の猫谷こconaです。普段の活動は雑談やゲーム実況、そして天文解説や星空の案内をしています。天文初心者大歓迎! 詳しくない方にもわかりやすく、楽しく宇宙の魅力を発信中です。よければみなさんも、配信に遊びに来てみてくださいね。

YouTube: @nekoya_cocona
X: @nekoya_cocona

「全国の天文ファンの方に、もっと気軽に最新の望遠鏡を使ってほしい」そんな思いで始まったレントミは、なんと全国送料無料でお届けしてくれます。地方在住の方にも優しすぎる……! さらになんと天体観測用だけでなく、コンサート向きの双眼鏡なども用意されています。ライブでの推し活にも対応してくれるなんて、レントミやりおる! 買おうとするとハードルが高くて、レンタルなら気軽に楽しめますね。

Web サイトで機材とレンタルの日にち



届いたボックスの状態。とっても頑丈そうな箱で届きました。返却時は望遠鏡と一緒に貼っている送り状を貼って、元の箱で返送します。



レントミ <https://rentomi.jp>

天文ハウス TOMITA の望遠鏡・双眼鏡レンタルサービス。一年先の予約もOK。レンタル商品を破損した場合でも安心な「安心レンタル保険」がセットになっている。



を決めて、会員登録をして代金を支払います(今回借りた Seestar S50 は7泊8日で税込9000円)。届くのが楽しみ!

Seestar を組み立てよう

レンタル開始日に Seestar が届きました! レントミ特製の Seestar レンタル専用ボックスに入って届きました。とっても丁寧な扱いで安心です。ふだん A80mf を使っている猫谷としては、それよりふたまわりほど小さい Seestar は「これが望遠鏡なのか……?」と疑ってしまいそうになるほどとってもコンパクト。ボックスを開けてみると、中身は取扱説明書・クイックガイドなどの書類。「Seestar」と書かれた黒い箱には望遠鏡本体のほか、アクセサリ(太陽フィルター、充電ケーブルなど)が入っていました!

さっそく組み立ててみました。三脚を開いて伸ばして望遠鏡をセット。ネジ穴に固定して……組み立て終わった状態がこちら(右上)。他の望遠鏡に比べると、やっぱり小さめサイズで可愛いですね。今回は脚を伸ばして使用していますが、全く伸ばさない状態でもそのまま使うこ



子持ち銀河 M51 (撮影時間 5分)。M51 は普通の望遠鏡だとぼんやりと形がわかる程度なので、「ここまで見られるんだ!」と感動しました。



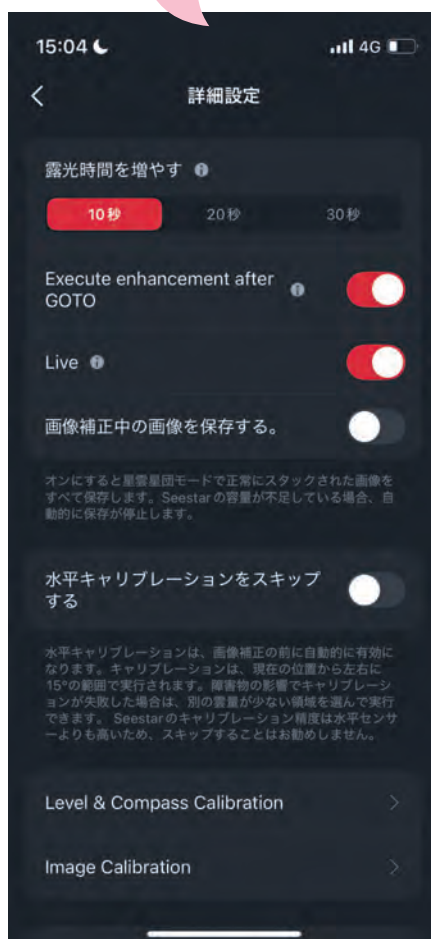
「太陽系」の月専用モードで撮影。撮影時に倍率も変えられます。クレーターまではっきり映りました!



付属の三脚を広げて大まかに水平を調整し、Seestar S50 本体を載せます。これでセット完了です!



「メインメニュー」から「詳細設定」にアクセス。露光時間の設定や画像の保存などの設定が行えます。



アプリを使って水平を確認し、三脚の調整ダイヤルを回して微調整します。しっかり行っておくことで導入や撮影がスムーズになります。



方角合わせもアプリにおまかせ。指示にしたがって本体を三脚ごと回転させます。完了したら「Complete」と表示されます。





天王星

皆既月食と天王星食

このときは天王星食が皆既中に起こった。天王星を基準にして合成しているので地球の影が歪な形になっている。恒星を基準に合成しても地球の影は同じように円にはならない。

2022年11月8日

18時35分04秒～21時25分13秒

ボーグ 77 ED II + 1.4×テレコンバーター DG (合成

714mm F9.3) ニコン Z6II ISO 400 ~ ISO 1600

1/500 ~ 2秒 タカハシ P-2

未明の赤い月

9月8日皆既月食

TOTAL LUNAR ECLIPSE

皆既月食の観測

満月が地上を照らすと、外灯がなくても周囲を見渡せる。そんな眩しく明るい満月が、じょじょに地球の影に入り、輝きを失っていく。皆既中には赤銅色となり、夜空に浮かぶ月は何度見ても神秘的だ。

月食は、太陽－地球－月がほぼ一直線に並んだとき、月が地球の影に入ることによって起こる。地球の影には本影とその周囲の半影がある。半影は大きさを持った太陽面の全部が地球に隠されきれておらず、月をまだ照らしている部分。本影は太陽光が完全に地球によって遮られた部分で、月

が本影に入ると、じょじょに欠けていく部分月食となり、月全体が入りきると皆既月食になる。

皆既食中の月は赤銅色になるが、地球の影に入っても完全に暗黒にならない理由は、太陽光が地球大気によって屈折し、うっすらと月面を照らすためである。赤っぽく見えるのは、夕日が見える原理と同じで、波長の長い赤い光のほうが大気を通過しやすいからだ。

日本国内では2022年11月8日以来の皆既月食であり、全国各地で部分食の始まりから終わりまで見ることができる。皆既は約1時間22分継続する。月が欠けていく

9月8日の未明から明け方にかけて、西の空で皆既月食が見られる。全国で本影食の全経過を見ることができる好条件の現象だ。双眼鏡、望遠鏡だけでなく、肉眼で見ても楽しめる。また、スマートフォンを使った撮影も楽しめるだろう。今回の皆既月食の観望のポイントや拡大撮影、景色を入れた撮影方法まで解説していこう。

解説◎谷川正夫

様子や、月食の進行時刻は全国同じだ。

9月7日の夜、日付が変わった8日の1時27分から南西の空で部分食が始まる。皆既食は2時31分から始まり、3時53分に終わる。東京では、皆既食が終わるころに薄明が始まる。部分食は4時56分に西の低空で終了し、復元した月は日の出後に沈んでいく。

夜明けで空が明るくなり始める時刻や、太陽が昇る時刻、月が沈む時刻は地域によって異なる。北海道や東日本では、薄明の始まりと月没の時刻が早く、月の高度も低くなる。一方、西日本から沖縄へ行くほど、月食の経過を薄明が進んでいない

比較的暗い空で、より長い時間、しかも高い高度で観察できる。

今回の皆既月食は夜半過ぎから始まり、日の出前に終わる。日本では、月が西の空に傾いた状態で起こるため、空の低い位置での皆既月食となる。後半の部分食は沖縄以北の国内ほとんどの地域で薄明中となるが、月が沈む前に月食（本影食）の全経過が見られる。南西から西の空が開けた場所で楽しもう。

皆既月食は肉眼で見てもその光景は異様に趣があるが、双眼鏡を使うと感動がさらに増すので、ぜひおすすめしたい。月食は、食が深くなるほど月が地球の影に入った部分の赤銅色が見えてきて、その色や明るさのグラデーションがこの上なく美しい。

9月8日の皆既月食

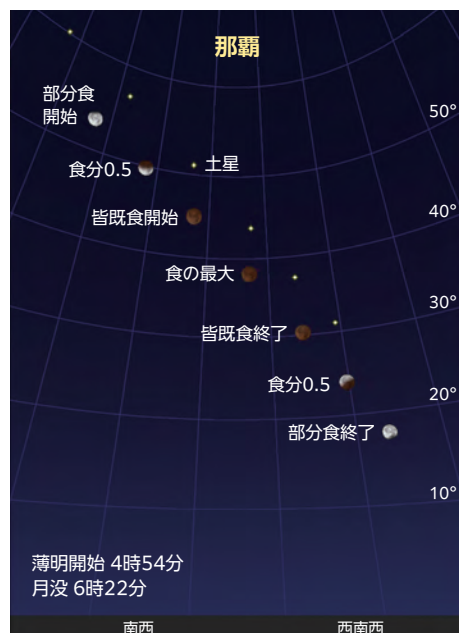
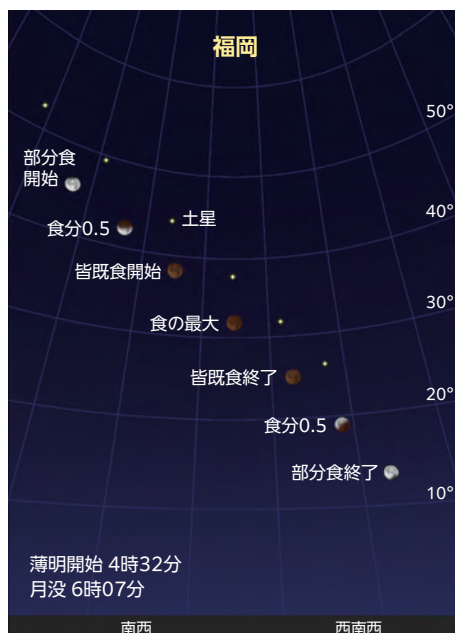
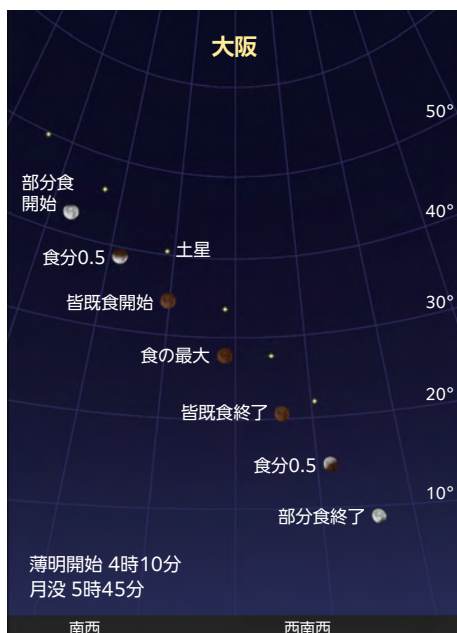
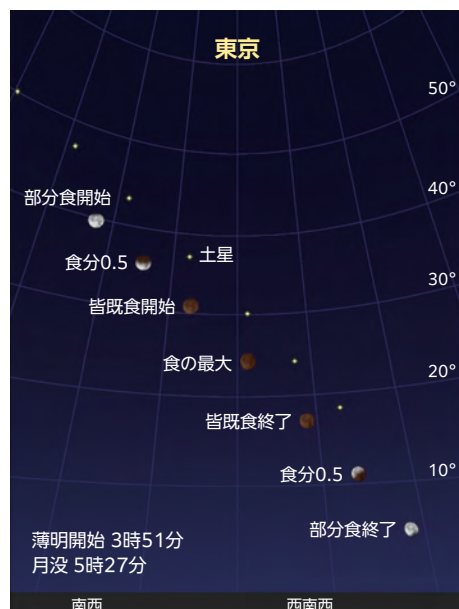
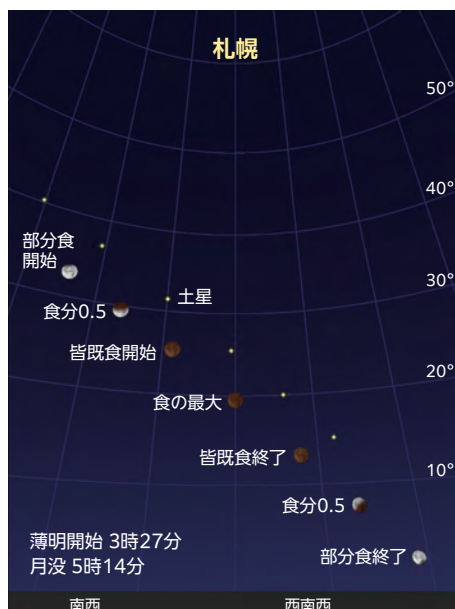
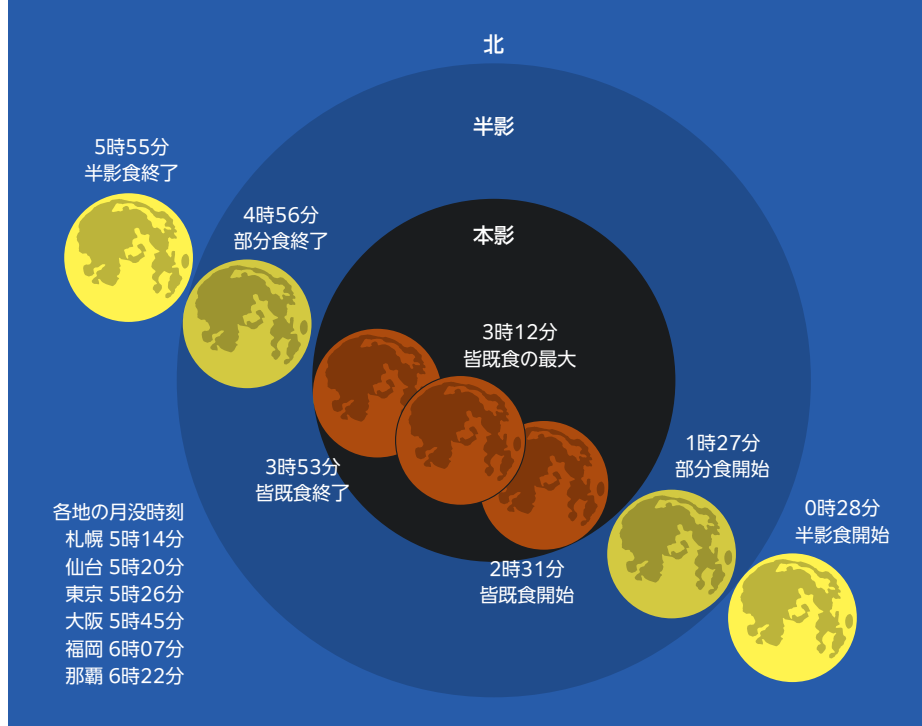
地球の影を通過する月の動き（右上）

今回の月食は、本影の中心から南側を通過する。最大食分1.36と深めで皆既継続時間は約1時間22分もある。

日本各地の月食の進行

皆既食の開始・終了など、月食の進行における時刻は日本全国どこでも同じだが、薄明の始まりや月没の時刻は観察場所によって異なる。薄明の開始が遅く、月の高度が高いという点では、西へ行くほど観察条件が有利になる。

	時刻
部分食開始	01時27分
食分0.5	01時58分
皆既食開始	02時31分
食の最大	03時12分
皆既食終了	03時53分
食分0.5	04時26分
部分食終了	04時56分



全ラインナップ研究

Askar 屈折望遠鏡の すべて

ここ数年の天体写真シーンを語るうえで重要な話題の1つとして、海外の望遠鏡メーカーの躍進は外せない話題だと思います。その中でも、中国・SHARPSTAR社のブランド「SHARPSTAR（シャープスター）」と「Askar（アスカ）」は、2020年以降、屈折望遠鏡だけでもじつに20種類以上の天体望遠鏡を世に送り出し、その高い性能とコストパフォーマンス、デザインで、国内外の多くの天文ファンから支持されてきました。天体望遠鏡ショップ店

員として、誰よりもSHARPSTAR社の望遠鏡に触れてきた視点から、今一度、各シリーズの特長や特性を紹介します。

紹介・作例◎ 渡邊耕平

(望遠鏡ショップシュミット)

203 APO p 45

151 PHQ p 44

SQA 106 p 39

80 ED p 41

50 EDPH p 40

V (80) p 42

FRA 500 p 43

71 F p 41

FMA 135 p 38

OP
TD. Since 1992



Askar/SHARPSTAR ブランドと屈折シリーズの全容

中国のSHARPSTAR 社

中国・浙江省の嘉興にあるSHARPSTAR 社（嘉興銳星光学儀器有限公司：Jiaxing Ruixing Optical Instrument Co., Ltd）は、今年で25周年を迎える天体望遠鏡メーカーです。社名を冠する中級者向けの「SHARPSTAR」ブランドと、ハイアマチュア・プロ向けに2019年に誕生した「Askar」ブランドを展開し、口径30mmの小型鏡筒から、口径200mmを超える大口径鏡筒まで、屈折望遠鏡を中心に幅広いラインナップを揃えています。

日本での価格は、近いスペックを持つ国産鏡筒と比べて7～9割ほど。米ドルベースだともう少し安いのですが、ここ数年で変動した為替の影響が大きく出ています。光学性能や機能面では、国産フラッグシップ機と比較してみても遜色なくコストパフォーマンスは高いと言えるでしょう。

個性豊かなシリーズ展開

一般的に天体望遠鏡にはフォト機、フォトビジュアル機、アストログラフなど、その望遠鏡の主な使用用途を想定したさまざまな呼び方がありますが、それぞれ慣例的に呼ばれているだけだったり、造語だったりと明確な定義はありません。

2025年8月時点でのAskar/SHARPSTARの屈折望遠鏡シリーズには大きく分けて5つの製品群があり、それぞれのシリーズにはその特徴をあらわした英語の頭文字3文字が与えられています。たとえば、FRAシリーズは「Flatfield Refractor Astrograph + 焦点距離」が命名規則となっており、これを直訳すると「平坦な像面を持った屈折天体写真鏡筒」ということになります。つまり、この望遠鏡は写真用（アストログラフ）ですよということです。ただし、眼視ができないということではなく、アダプターを取り替えることで眼視を楽しむことのできるバランスの取れた構成をしています。一方で同じAstrographを冠した頭文字が付いているSQAシリーズは、写真性能最優先で設計されているためバックフォーカスが短く、天頂ミラーやプリズムを取り付ける余裕がないので、基本的にアイピースは取り付けできません。他の例として、PHQ

とAPOはF値こそ似ているものの、直焦点の撮影性能や重さに大きな差があります。

Askar と SHARPSTAR ブランド

メーカーによると、アドバンスドベッツバル設計をベースにしたより高性能で先進的な製品が「Askar」、それ以外を「SHARPSTAR」としているとのこと。ポートレートレンズとして開発された「ベッツバル」とは異なる設計ですが、前群と後群で分けられ、Fが明るく収差の少ないフラットフィールドな天体望遠鏡を「アドバンスドベッツバル」と呼称しています。

Askar/SHARPSTAR 屈折望遠鏡の適正

横軸の右に行くほど写真性能寄り、左に行くほど眼視性能寄り、上下が各シリーズの鏡筒の口径比（F値）で、上に行くほどF値が小さく明るい鏡筒、下に行くほどF値が大きくなり暗い鏡筒となっています。Rは焦点距離を短縮するレデューサーのことです。口径や対応する補正レンズによって、製品のラインナップの中でも立ち位置は変わりますが、それぞれがどのような立ち位置にいたかがイメージしやすいと思います。

眼視



SHARPSTAR社のMichael Fong 社長

子どもの頃から天体観測が趣味。中国の医療の専門学校を卒業後、臨床検査技師として病院に就職。医療の現場で使用されている顕微鏡などの光学機器と、趣味の天体観測から着想を得て、2000年にSHARPSTAR社を設立し独立。望遠鏡のコンセプトやアイデアはほとんど自ら考案したものが基となっている。ビジネス以外でもプライベートで年に何度も日本を訪れるほどの日本好きで、最近は日本との二拠点生活で、新しい事業を興そうと考えているとか。

Michael Fong 社長からのメッセージ

「日本の天体ファンの皆さんのレベルはとても高く、そのような方々に当社の望遠鏡を選んでいただけるのはとても嬉しく思います。これからも皆さんに満足していただけるように、より高い品質管理、より魅力的な製品作りを目指していきます」



FMAシリーズ

135/180Pro

FMA : Flatfield Multifunction Astrograph+ 焦点距離

手のひらサイズの 本格アストログラフ

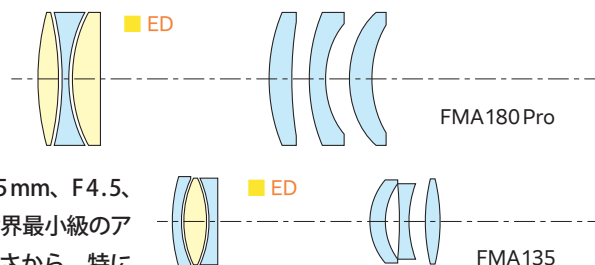
一見するとファインダースコープのような、小さい鏡筒に詰め込まれたメーカーの技術。電視観望から本格撮影まで、場所や架台を選ばずに活躍します。撮影欲も所有欲も同時に満たしてくれるユニークなアストログラフです。

FMA シリーズ概要

FMA は Askar ブランド立ち上げ時から販売されていて、ブランドの独自路線を強く印象付けたユニークなシリーズです。口径 30 ~ 50mm と手のひらにすっぽりと収まるほど小型でありながら、平坦なイメージサークルを持ち、本格的な撮影用鏡筒としてはもちろん、ファインダーやガイドスコープ、フィールドスコープとしても使える、名前の通りのマルチファンクション(多用途)なアストログラフです。

その小ささと手頃な価格と高い性能で、ベランダなどの限られたスペースでも簡単に使える高性能な写真鏡筒、電視観望に向いている望遠鏡というイメージを持っている方も多いと思います。ファインダーやガイドスコープと同じような見た目や口径ながら、光学系は ED レンズやフラットナーを内蔵した 6 ~ 7 枚玉。手に取るとずっしりとして重厚感があります。合焦は直進ヘリコイドが採用されています。

2022年5月号の「15万で始める電視観望」の中で紹介したように、価格も10万円以下と手に取りやすく入門者からベテランまで幅広い層に人気です。現在は口径30mmのFMA 135、口径40mmのFMA 180Proの2機種が販売されています。



FMA 135

口径30mm、焦点距離135mm、F4.5、全長113mm、重さ280gの世界最小級のアストログラフです。その小ささから、特に電視観望などのお手軽撮影で人気の鏡筒ですが、ED レンズ1枚を含む6枚構成のしっかりしたレンズ構成で、APS-Cのフラットフィールドなイメージサークルを備えているため、冷却 CMOS カメラや一眼カメラを使用しても本格的な撮影にも使用することが可能です。CMOS カメラの長時間露光で、口径の不利はある程度カバーできるので、ファインダーやガイドスコープほどの小さい望遠鏡を使って、隙間時間にサッと天体観測という手軽なスタイルで本格撮影をすることができます。

FMA 180 Pro

前モデル FMA 180 から「アストログラフ」部分の性能を向上させた撮影用モデルで、フルサイズでも周辺まで十分な光量を得られます。マルチファンクションな部分、たとえばレデューサーの取り外しで F5.5 の直焦点が使用できることや、鏡筒を分割してダイアゴナルを入れられることなどができなくなったかわりに、レンズ設計が一新されて、よりシャープに写るようになりました。フィルターの取り付けも従来の対物側ではなく、後玉とカメラの間に付けられるようになったことで撮影用モデルとしての性能を向上させています。「pro」と付くモデルはこの FMA 180Pro と FRA 300pro の2機種のみですが、pro の名称はいずれもシリーズの中で最もシャープな設計の鏡筒に与えられています。



FMA 135 の作例「M42」

Askar FMA 135 Player One Neptune-C II
ゲイン 95 180秒×32 (96分)

FMA 180 Pro の作例「アンタレス付近」

Askar FMA 180 Pro キヤノン EOS-RP HKIR
120秒×20 (40分)

星の街道をゆく

プラネタリウム はじまりへの旅－後編

近代的な光学式プラネタリウム誕生から100周年……

プラネタリウムのさらなる源流を追い求める旅は、

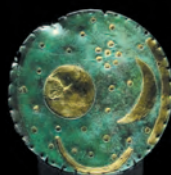
紀元前1世紀の古代ギリシャで作られた太陽系の姿を表す

プラネタリウム「アンティキテラの機械」に行き着いた（先月号参照）。

だが旅はまだ終わらない。歴史をさらに遡り、

青銅器時代のヨーロッパに存在した謎に包まれた遺物

「ネブラ・スカイディスク」を見るため、再びドイツに旅立った。



中山満仁 なかやま みつひと

プラネタリウムライター。1976年熊本県生まれ。日本と世界各地のプラネタリウムを鉄道で訪ねて紹介する活動をしている。

X/Instagram @mitsuto1976



プラネタリウム
100周年



© LDA Saxony-Anhalt, Juraj Lipták



(上) ネブラ・スカイディスクの表面。現在では緑青に覆われているが、作られた当初は青銅に原始的な化学処理が施され夜空のような黒い色をしていたという。

(左) 佐賀県鳥栖市内にあるネブラ・スカイディスクのレプリカ展示石碑。ガラスケースが結露していてちょっと見えづらいのが残念。

(下) 夜のハレ（ザーレ）市庁舎広場。街の語源でもある塩の交易で栄えたハンザ同盟都市で、美しい旧市街の街並みが遺されている。



盗まれた天文遺物

1999年7月4日、日曜日の暑い午後。金属探知機とつるはしを手にした二人の男がドイツ北東部ザクセン＝アンハルト州の森の中を歩き回っていた。東西ドイツ統一後、東ドイツ領内には埋蔵文化財を狙った盗掘者が大量に流入して数万点以上の遺物が盗掘されており、特に古代遺跡が多数存在するザクセン＝アンハルト州ネブラ周辺では森の中は盗掘者が掘った穴だらけだったという。やがて金属探知機の反応音が鳴り、地面につるはしを振り下ろすと刃先が何かに当たった。地中から現れた奇妙な物体を見た二人は思わず顔を見合わせた。「何だこりゃ、バケツの蓋か?」「待て、金だ!金が貼ってあるぞ!」男の一人はそう言うのとつるはしで剥ぎ取られた金をポケットにねじ込む。男たちは掘り出した直径30cmほどの円盤と短い剣や腕輪をトラバント（東独時代の小型大衆車）に載せて意気揚々と引き揚げた。「こいつは高く売れそうだ。帰ったら祝杯といこう!」

これが後にネブラ・スカイディスクと呼ばれる世界最古の天文盤が“発見”された一部始終である。その後闇マーケットで転売された謎の遺物はそのままだ姿を消すはずだったが……闇に消えるはずの遺物がその後たどった物語と、解き明かされた驚愕の正体を求めて旅に出よう。

ネブラ・スカイディスク（天文盤）は実は日本とも縁がある。2003年に学術的に正確に調査分析された上で精巧な複製品が製作されたが、それは2005年に開催された愛知万博で「人類の比類なき記録」として世界初公開された。また発見地の近くにあるツァイツ市から友好交流都市である佐賀県鳥栖市にレプリカが贈呈され同市内の東公園に屋外展示されている。鳥栖市は私の居住地からも近いのでさっそく見に行ったが、晩秋の夕陽に照らされた公園の片隅で石碑に嵌め込まれた奇妙な円盤は、表面の金の模様がまるで歪んだ笑顔のように見えた。見ていると心が奪われるような気になって、帰宅した私はさっそくドイツ行きの航空券を予約し、2025年4月28日、ドイツの南部の都市ミュンヘンに降り立った。

昼過ぎに中央駅から高速列車 ICE 706

横浜の大佛次郎記念館で働く西宮千里（にしみやちさと）は、大佛の実兄・野尻抱影の研究に打ち込んでいた。抱影は東京の出版社で中学生向けの雑誌にたずさわるうちに星への思いを取り戻し、誌上で読者と交流を深めつつ星空案内の記事を執筆し始める。星々の描写に惹かれた千里は休日にプラネタリウムへ足を運び、そこでふたたび「あの名前」を目にしたのだ。

連載小説

オリオンと猫

—野尻抱影と大佛次郎物語—

瀬名 秀明

題字・挿絵：吉原宏平

【第7回】

心より心へ

星燦々——文章が語る兄弟の目配せ

一月最後の月曜の朝、^{おさらぎじろう}大佛次郎記念館へと向かった千里の頬は、道行く人にはいくらか火照^{ほて}って見えたとかもしれない。前夜読み終えた^{きたかたけんぞう}北方謙三の長篇小説『抱影』の昂揚と興奮が身体に残っていた。北方謙三を読んだのは高校生のとき以来で久しぶりだったが、いつも了^おえた直後は自分でさえ気づいていなかった自分を取り戻したような気がする。それでいて同時に、いつか死んでゆく自分という物体を思い出すのだ。いまならやくざとも戦えるかもしれない、とさえ思わせてくれるのがこの作家の特徴ではあるのだが、今日千里を待つのは誰かの敵討ちではない。

千里はふだん使っているアメリカ山公園の元町・中華街駅6番出口のエレベーターではなく、フランス橋から自分の脚で階段を上り、公園のなかを真っ直ぐに進んでいった。

「始めさせていただきます、よろしくお願いします。今回の私の発表は、研究社の《中学生》と博文館の《中學世界》における野尻と大佛の寄稿内容を見直し、野尻が星の記事を書くようになってゆくまでの軌跡を改めて追ひ、これまであまり

知られていなかったと思われる知見をまとめてみたものです」

昼休み後、さらに一時間経って、来館者が少なくなる時間帯。千里はノートPCを操作して、会議室の白壁にプレゼン資料の一枚目を投影した。テーブルには^{おくの}奥野館長や^{たかおか}高岡先輩を始め、館の研究員が全員揃っている。高岡先輩の発案で、この一月から研究員で小規模勉強会を開くことになったのだ。午後の来館者の少ない時間帯に集まり、各自がいま調査しているテーマを発表し合う。いずれは今後の展示や《おさらぎ選書》の内容に繋げてゆきたい。記念館では以前から月一回の読書会が開かれているが、大学の先生たちの交流が主体で、館の研究員から何か成果を披露する機会はまずなかった。今月初めに千里が^{のじりほうえい}野尻抱影の最初期の作品を発見したことで館長と先輩たちの間で話し合いがあり、まずは勉強会の開催が決まったのである。

先週の高岡先輩の発表に続いて第二回の担当は千里だ。公園の階段を上り切ったときにも感じていた余燼^{よじん}は、この胸のなかに残っている——ふだん研究員はみな職務中でも「大佛先生」「抱影先生」と敬愛の念を込めて呼んでいるが、いまここでは敬称は抜きだ。

最初に千里が示したのは野尻が研究社で働き始めたところからの略年譜である。だがそれとはあえて直接連結しない話題から千里は発表を始めた。

「——《「^{ひとこえ}一聲は月が鳴いたか郭公^{ほととぎす}」》。これは野尻が研究社の雑誌《中学生》の主筆になってから、大正八年三月